

外国语言文化探索与研究书系

认知视角下中日语言中 植物惯用表现的对比研究

植物に関する慣用表現の認知言語学的研究
—日中対照分析—

段静宜◎著



北京第二外国语学院
旅游教育出版社

《中国语言学报》2023年第1期

认知视角下中日语言中 植物惯用语表现的对比研究

——以“三叶草”“四叶草”“五叶草”为例——

张明华



中国社会科学出版社
CHINA SOCIAL SCIENCE PRESS

图书在版编目 (C I P) 数据

认知视角下中日语言中植物惯用表现的对比研究 /
段静宜著. — 北京 : 旅游教育出版社, 2022. 7

(外国语言文化探索与研究书系)

ISBN 978-7-5637-4426-8

I. ①认… II. ①段… III. ①植物—隐喻—对比研究
—日语、汉语 IV. ①H36②H15

中国版本图书馆CIP数据核字(2022)第120230号

外国语言文化探索与研究书系

认知视角下中日语言中植物惯用表现的对比研究

段静宜 著

责任编辑	陈卫伟
出版单位	旅游教育出版社
地 址	北京市朝阳区定福庄南里 1 号
邮 编	100024
发行电话	(010) 65778403 65728372 65767462 (传真)
本社网址	www.tepcb.com
E - mail	tepx@163.com
排版单位	北京旅教文化传播有限公司
印刷单位	北京虎彩文化传播有限公司
经销单位	新华书店
开 本	787 毫米 × 1092 毫米 1/16
印 张	13.75
字 数	170 千字
版 次	2022 年 7 月第 1 版
印 次	2022 年 7 月第 1 次印刷
定 价	88.00 元

(图书如有装订差错请与发行部联系)

目 录

第一章 序論	1
1.1 研究目的と背景	1
1.2 先行研究と問題点	2
1.2.1 植物に関する意味的研究	2
1.2.2 植物に関する文化的研究	4
1.2.3 植物に関する認知的研究	7
1.3 研究の流れと方法	9
1.4 まとめ	13
第二章 認知言語学のアプローチ	14
2.1 認知言語学のメタファー理論	15
2.1.1 メタファーの身体的基盤	18
2.1.2 経験のゲシュタルト	19
2.1.3 メタファーと類似性	21
2.2 メトニミーとシネクドキ	21
2.3 カテゴリー化	25
2.3.1 プロトタイプと拡張事例	27

2.3.2 イメージ形成とスキーマ	29
2.4 メタファーと文化	32
第三章 植物の慣用表現についての認知的分析	34
3.1 記号化と意味拡張	35
3.1.1 漢字記号の位置づけ	35
3.1.2 漢字とイメージスキーマ	37
3.1.3 漢字と連想プロセス	40
3.1.4 漢字と植物の社会・文化的背景	42
3.2 植物と認知プロセス—「木」と「草」を中心に	48
3.2.1 「木」と「草」のカテゴリー化	48
3.2.2 身体的経験と意味拡張	49
3.3 植物と認知プロセス—「花」を中心に	58
3.3.1 「花」のイメージ形成	58
3.3.2 「花」のカテゴリー化	59
3.3.3 「花」と意味拡張のメカニズム	73
3.4 まとめ	80
第四章 日中両言語の植物のメタファー	82
4.1 「人間は植物」の概念メタファー	82
4.1.1 植物のメタファーの身体性	82
4.1.2 「生」と「死」のメタファー	87
4.2 植物の人体領域への写像	96
4.2.1 女性に関するメタファー	96

4.2.2 男性に関するメタファー	111
4.3 植物の感情領域への写像	116
4.4 植物の精神領域への写像	128
4.4.1 「植物は美德」のメタファー	128
4.4.2 「植物は性格」のメタファー	145
4.5 植物の社会構造への写像	149
4.5.1 身分と地位のメタファー	149
4.5.2 勢力のメタファー	154
4.6 まとめ	156
第五章 植物の詩的表現と認知プロセスの諸相	157
5.1 自然描写と認知プロセス	158
5.1.1 自然描写と言葉の身体性	158
5.1.2 自然描写と感情移入	164
5.1.3 五感の身体性と共感覚の修辞性	170
5.2 レトリックと認知プロセス	174
5.2.1 花言葉のレトリック性	174
5.2.2 連想プロセスと主観性	175
5.2.3 知識フレームの制約	179
5.3 ブレンディングと認知プロセス	181
5.3.1 イメージのゲシュタルト性	182
5.3.2 日中文化の繋がりと変容	190
5.4 まとめ	191

第六章 結語と展望	193
6.1 本研究成果	193
6.2 今後の研究の展望	199
6.2.1 文化的意味と異文化コミュニケーション	199
6.2.2 言語教育の場への応用	200
参考文献	202
外国語参考文献	202
中国語文献	209
例文出典及び使用するコーパス	213

第一章

序論

1.1 研究目的と背景

植物は、長い歴史の中で人間に影響を与え続け、今日でも我々の日常生活を彩るかけがえのない存在である。植物文化は、人間の文化のさまざまな面を特徴づけるものであり、文化が反映される言葉の世界にも深く浸透している。主体が外界を知覚し、理解していく認知プロセスには、主体の外界に対する主観的な視点、別の言い方をすれば主体の身体性にかかわる視点が反映されている。例えば、我々は、「芽が出る」、「花が咲く」、「葉が落ちる」などの植物の成長過程や変化を描写する言語表現を、自身の身体経験に基づいた比喩的な表現として用いる。このように花木の意味が創造的に拡張されるプロセスは、メタファー、メトニミー、連想などの認知プロセスと密接に関連している。植物を含む自然界を通して世界を解釈し、意味づけしていく人間の修辭的な認識により、日常言語の意味はより豊かになっている。また、植物に関する言葉は単に言語表現として機能するのではなく、その背後には、歴史や文化、各時代の宗教や政治と深く結びついた人間の認知プロセスが働いている。

植物文化の交流という観点からも、中国は日本との間に長い歴史がある。「桃」、「梅」、「菊」、「牡丹」などは中国原産の植物であり、中国文化の一面を特徴づけている。これらの植物は、日本に伝わると日本独自の文化的な意味

が付与され、日本文化に定着した。特に、「桜」、「椿」、「紅葉」などは日本の伝統的な植物として、日本文化のシンボリックな存在になっている。また、「バラ」や「カーネーション」に関する西洋の代表的な植物文化は世界中に広がっている。植物文化はその国の民族、社会、風習、歴史などと深く関係している。植物に関する言葉は、社会文化的な背景や民族文化の心理などの特徴を反映している。各地域・国の文化背景や自然環境には違いがあるため、植物文化も多様である。このような差異を理解することは、各地域・国の社会文化と民族心理をより深く理解することに通じる。

本研究では、認知言語学の視点から日中両言語における植物の慣用表現を体系的に分析することにより、植物に関する言葉の意味拡張、イメージ形成、メタファー、メトニミー、連想などの認知プロセスの諸相を明らかにする。また、主に「人間は植物」という概念メタファー表現について、植物の概念に関わる言葉の概念体系を分析し、日本語と中国語の共通性と相違点、両言語における植物に関わる発想の違いを考察する。さらに、この考察に基づいて、植物に関わる日中両言語の修辞表現について考察し、両言語における植物の文化的な意味の諸相を明らかにする。

1.2 先行研究と問題点

ここでは、植物に関する研究の現状を踏まえて代表的な先行研究の問題点を指摘する。植物は、言語学、人類学、社会学、植物学、民俗学などの領域で研究されている。言語学的視点からの研究は、主に意味的研究と文化的研究の二つに分類される。以下では、これまでの植物に関する意味的、文化的研究を批判的に検討し、認知言語学の視点から、植物表現に関する新たな研究の方向を探る。

1.2.1 植物に関する意味的研究

植物に関する言語表現は、植物それ自体を表現するために使われるだけでな

く、人間の多様な生活世界を表現するために使用される。植物に関する概念は、人間の概念体系の一部を特徴づけている。植物は我々の身近な存在として、認知主体が外部世界を理解する際の伝達の道具の役割を担っている。換言するならば、植物は、人間世界と外部世界を繋ぐ媒介である。植物に関する意味的研究としては、以下のような研究がなされている。

- (1) 言語分野における研究
 - a. 植物表現に関する言語学的研究
 - b. 植物表現に関する文学的研究
 - c. 植物表現に関する比較的研究
- (2) 時間的視点からの研究
 - a. 通時的研究
 - b. 共時的研究
- (3) 植物のカテゴリーに基づく研究
 - a. 上位カテゴリーの研究（例：「花」、「草」、「木」…）
 - b. 下位カテゴリーの研究（例：「梅」、「松」、「桜」…）
- (4) 言語表現レベルに基づく研究
 - a. 語彙レベルの研究（例：四字熟語、ことわざなど）
 - b. 句レベルの研究（例：慣用句、イディオム、詩歌など）

植物の意味的研究においては、特にメタファー表現の分析がなされている。例えば、初山（2005）は、（1）人間の目的を達成すること、（2）人間の一生の諸段階、（3）女性の成長、（4）精神面の変化という四つの面から、人間と植物の成長過程の類似性に注目し、「人間（の営み）を植物（の営み）を通して捉える（植物としての人間）」というメタファーが存在することを明らかにしている。さらに、構造的類似性の視点から、「人間は植物」の概念メタファーを提唱し、

植物に関するメタファー研究の重要な方向を提示している。また、陳（2015）は、中国語と英語における植物のメタファー表現を考察し、植物に関する表現の人体領域および抽象領域への写像を分析し、中国語と英語における植物メタファーの共通点と相違点を明らかにしている。

メタファー研究以外では、大石（2010）が植物の慣用表現の使用状況を調査し、「花が咲く」、「開花」、「花を咲かせる」のような植物に関する表現を分析した結果、このような表現に人間の主観的感情が比喩的に表現される事実を明らかにしている。日本においては、植物に関する言語表現の意味的研究はこの大石の研究以外に殆ど見られない。一方、中国では、陳（2016）によって植物に関する言語表現の多義性や意味拡張が分析されている。

日中対照研究としては、田（2014）が、日中の樹木に関する慣用表現における比喩イメージを対比している。また、張（2015）は、中国語と日本語の「花」の慣用句の対照研究を行い、日中両国の「花」に関する表現の一致と相違を明らかにしている。しかしながら、これらのどちらもが修士論文レベルの研究である。

文学的研究としては、中国では、詩歌や文学作品における植物の意味的研究がなされている。特に『詩経』や『楚辞』のような古典文学に現れる植物の意味解釈についての研究が多く、また、漢詩、唐詩および宋辞に詠われる植物に関する研究も広くなされている。また、『万葉集』や『源氏物語』を代表とする日本の和歌や文学作品における植物に関する言語表現との対照研究も見られる。

以上、現時点では、植物についての意味的研究は、中国側は言語学、文学、中英比較の側面から一定の研究成果が見られるが、日本では、この方面の研究はまだ本格的にはなされていない。

1.2.2 植物に関する文化的研究

植物は、人間の身近にあり日常生活に不可欠な存在である。植物は、社会の発展とともに人間の感情を伝える媒介となり、文化的意味を持つようになった。植

物に関する表現は多種多様であり、言語や文化に関する研究の重要な研究テーマにもなっている。また、植物とのふれあいは、我々の文化に浸透している。植物に関する文化的研究としては、以下のような視点からの研究が挙げられる。

- a. 植物に関する文化的歴史
- b. 植物に関する神話伝説、物語
- c. 植物に関する民俗（風俗習慣、年中行事など）
- d. 植物に関する芸術創作（植物をモチーフとするデザインなど）
- e. その他（園芸など）

中国では、朱（2010）による書籍に植物に関する物語や民間伝説が収録されている。何（2008）は、中国の花文化を詳しく紹介している。また、植物のネーミングに関しては、段他．（2009）による専門的な研究がある。さらに、譚（2004）は、古代中国語における植物の命名の文化背景について論じている。

日本では、法政大学出版局から出版された『梅』、『桃』、『蓮』などに植物の文化史が記載されている。また、『柳の文化誌』（柳下 1995）および『新桜の精神史』（牧野 2002）に、それぞれ日本の柳および桜の文化が記述されている。川口（1982）は『花と民俗』で民俗植物学を紹介している。植物に関する風習は、民俗、年中行事にも関係していることを考慮すると、植物についての文化的研究の多面性がうかがえる。植物文化についての研究は、これらの専門的な著書が貴重な資料となる。

日中の植物文化を比較した専門的な書籍はないが、中国では、桃、菊、梅、椿などの植物文化について日中を比較した論文が存在する（姚2001、久保他. 2015、呉他. 2015）。植物文化についての書籍、論文、記述などにみられる中国と日本の植物文化の関連性には、以下の三つの特徴がある。

I. 中国の植物文化は日本文化に定着する

中国と日本の植物文化は、部分的に融合している。桃、梅、菊などの薬用または食用の価値が高い中国原産の植物は、日本に伝わりその土地に定着した。その際に、これらの植物に関する中国文化の一部も日本に伝えられた。

例えば、伊邪那岐命が桃の実で黄泉国から追ってきた悪霊を撃退するという『古事記』に記載された伝説は、中国において桃の木が厄払いの神樹であるという信仰に由来する。このような民間の植物信仰以外でも、中国文人の間の「賞梅」や「賞菊」の流行が、日本の貴族階層へと伝わった。また、日常生活の面では、日本では節句に食べられる「七草粥」は、中国の風習からきたものである。このように、中国の民間信仰、政治的流行、日常生活などにみられる植物文化の諸相が、日本文化と日本人の生活に反映されている。

II. 中国の植物文化は日本文化に変容する

農林技術の発展によって中国伝来の植物が日本で改良され、そこから新たな文化が生み出されている。例えば、3月3日に行われる日本の雛祭りは、日本独特の文化的、民族的行事である。「桃の節句」とも呼ばれるこの日は、女の子のお祝いの儀式として人形に桃の花を飾る風習がある。この「桃の節句」の由来は、中国の「上巳」である。古代中国では上巳の日に川で身を浄めて邪気を祓う習慣があり、これが日本に伝わって川に人形を流して厄災を祓う流し雛の風習となった。桃の花を用いるのは、桃の花と女性の関連性や桃には健康長寿の意味が附与されたためであろう。このような文化的な意味の変容は、松、柳、牡丹、蓮などの植物文化にも見られる。これらの植物も日本に伝わり、そこで新しい文化的意味が附与されて日本文化を豊かにしている。

III. 日本の植物文化は中国に逆輸入される

一方、日本独自の植物文化も中国文化に影響を及ぼしている。中国において、「桜」のイメージは梅、桃、牡丹、菊などの伝統的な花のイメージと比べて薄か

ったが、近年、日本の「花見」の影響で、春に桜を楽しむ人もその場所も多くなっている。また、日本の「華道」や「茶道」にみる「侘び寂び」の美意識の影響も見られるようになってきた。このように、植物そのものではなく、植物に附与される文化的な価値が、外国文化にさまざまな影響を与えている。「食文化」が国々の象徴であるのと同様に、「植物文化」も文化の歴史と生命力に密接に関わっている。

現在、植物文化の比較に関しては、「東洋文化」と「西洋文化」の比較が主であり、同じ東アジアの国である日本と中国の植物文化にはそれほど大きな相違がないと思われるためか、十分に研究されていない。このような現状を踏まえ、本研究では、ケーススタディを通して、日中両国における植物文化の諸相を考察する。

1.2.3 植物に関する認知的研究

従来の植物についての研究は、主に植物に関わる言語表現と文化現象を中心に行われている。植物に関しては、言葉のレトリック表現として修辞学の面から分析する研究が存在するが、人間の認知プロセスの視点からの、植物の言語表現についての体系的な考察はまだ少ない。認知的な視点に基づく研究の代表的なものとして、陳（2015）および陳（2016）による研究が挙げられる。以下にこれらの代表的な研究を紹介する。

陳（2015）は、概念メタファー理論に基づいて、第二言語習得の視点から中英両言語における植物のメタファーを考察している。植物メタファーの理解に心理的要因と文化的要因が働いていることを考慮し、アンケート調査の結果から植物メタファーの異文化コミュニケーションにおける重要性を明らかにしている。また、このような考察から得られる知見を第二言語教育に適用している。

陳（2016）は、認知意味論の視点から、中英両言語における植物に関する語彙の語構成、意味拡張、カテゴリー化、文化的意味などを研究し、特に植物のネー

ミングを中心に考察を行っている。具体的には、植物名の「擬人化」と「擬動物化」の例を挙げながらネーミングの心理の一致と相違を分析し、中英両言語における植物語彙の意味的研究に貴重なデータを提供している。

陳（2016）の研究により、1994年以降、中国では中英言語比較の領域において、認知的視点から、植物語彙と植物メタファーを中心として言葉の意味拡張の研究が試みられている。この方面の研究を、表1-1にまとめた^①。

表 1-1 中国で植物に関する言語学研究の現状

研究テーマ	論文の数
中英両言語における植物語彙の比較研究	約 39 点
中英両言語における植物のメタファー研究	約 27 点
中外言語における植物語彙の比較研究（中日、中韓、中露、中泰など）	約 28 点
中国語を中心にする植物語彙に関する研究	約 21 点

このように、近年、植物語彙についての研究に注目が集まっているが、まだ研究の余地があり、特に、認知言語学の観点からの日中の植物表現についての対照研究は本格的に行われていない。以上の先行研究の現状を考慮し、植物に関する言語学的な研究は以下の観点から考察する必要がある。

I. 従来の研究では、植物に関する言葉の意味的研究は見られるが、辞書に載っている意味を羅列したり、慣用句などを分類したりするのが一般的である。植物に関する言語表現の意味拡張のプロセスや多義的な意味の内在的な関連性については研究されていない。植物表現のデータは膨大であり、植物表現の使用も、植物それ自体だけでなく、人体領域や抽象領域にまで拡張している。したがって、本研究は、認知的意味的研究の視点から、植物の基本語彙の意味拡張のプロセスに関わる身体性と主観性の分析を通して植物表現の意味拡張

① 中国知網による収集されたデータ。（2022年5月25日まで）

張のメカニズムを明らかにしていく。

Ⅱ. 植物のメタファー表現の研究は、カテゴリー別に考察するのが一般的であり、概念メタファーの視点から見た植物の概念体系と人間の概念構築の関係についての体系的な研究はなされていない。この現状を踏まえ、本研究では、植物に関する概念メタファーを研究対象とし、言語主体が外部世界を理解する際に重要な役割を担う身体性と主観性の諸相を明らかにしていく。

Ⅲ. 前述したように、日中植物の交流には長い歴史がある。本研究では、蓮、桃、梅、牡丹、松、竹、菊、桜、椿などの日中両国の文化に関わる植物のケーススタディを試みる。また、これらの植物の日中両国における文化的意味を考察し、植物に関わる日中の言語表現の文化のおよび社会的背景を明らかにしていく。

1.3 研究の流れと方法

本研究は、先行研究を踏まえ、認知言語学の理論を用いて以下の側面から日中両言語における植物に関する言語表現を考察する。

I. 植物の慣用表現に関する認知のメカニズム

考察に入る前に、本研究で扱われる「慣用表現」の範囲を明確にする必要がある。中国語には語彙レベルの表現として“俗語”、“成語”、“歇后语”などがあり、それに加えて認知度が高ければ、文レベルの詩句、歌詞、名言なども慣用表現として使用する場合もある。また、日本語には、語彙レベルの表現と文レベルの表現の厳密な定義がなされている。日本語には、「頭にくる」、「猫をかぶる」、「足を洗う」のような表現は一般に「慣用句」とみなされる。「慣用句」の特徴について、石田（2015：2）は、以下の二点を指摘している。

- a. 二つ以上の語から構成されている。
- b. 句全体の意味が個々の語の元来の意味からは決まらない。

以上の定義から分かるように、慣用句の本質は、句であることと特別な意味を有することであり、この点で語彙レベルの表現と違っている。また、石田（2015：3）は、従来の慣用句研究に基づいて、「慣用句」（あるいは「広義の慣用句」）を以下のようにまとめている。

- a. 挨拶語・応答語（森田 1966、白石 1969、1977）
おはようございます、いい加減にしないで、お変わりございませんか、すみません
- b. ことわざ・格言（白石 1969、1977）
牛は牛連れ馬は馬連れ、果報は寝て待て、知者は一を聞いて十を知る
- c. 連語（森田 1966、白石 1969、1977）
汗をかく、電報を打つ、将棋をさす、世話をやく、溜息をつく、麦をひく、木を割る、火をたく
- d. 狭義の慣用句（森田 1966、白石 1969、1977）
油を売る、鼻にかける、鯖を読む、頭にくる、エンジンがかからない、骨が折れる、気が利く、半日をつぶす、頭をかく
- e. 複合語・単語（白石 1969、1977）
苦手、天下り、大通り、とりあえず、恐れる、逃がす
- f. 擬音語・擬態語（白石 1969、1977）
こけこっこう、ごくっと、ぎじぎじ、にこにこ、すたすた

このような分類に関しては、文レベルの表現と語彙レベルの表現を区別していない、という批判がなされている。本研究は「慣用句」という言い方をせずに、